琉球大学学術リポジトリ

手書き世界地図にみる世界地図認識の課題　－地理教育の視点から－

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学教育学部
	公開日: 2007-07-18
	キーワード (Ja): 地理離れ, 手書き世界地図, 地図認識, 地理教育
	キーワード (En):
	作成者: 西岡, 尚也, Nishioka, Naoya
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/992

手書き世界地図にみる世界地図認識の課題
－地理教育の視点から－

西　岡　尚　也*

The problems of the global map recognition,
in the handwriting world maps.

—From the view point of the geography education—

Naoya NISHIOKA

Ⅰ．研究目的

1．イラクの位置がわからない大学生

日本地理学会地理教育専門委員会が「大学生・高校生へのアンケート」を実施した。具体的なデータを示して、「イラクの位置がわからない大学生が44％」という衝撃的な結果が報告された（資料1、2005年2月23日付、新聞各紙）。しかし、近年わが国で地理教育が軽視されてきた現状からみて、この結果は予想されたことである。

イラクは自衛隊が派遣された、日本の歴史上重要な意味を持つ国（地方・場所）である。無関心でいること自体考えられないことだが、その場所が認識できない人にとって、出来事やニュースへの興味・理解度は激減する。自分たちの払った税金が、なぜこのように使われているのか、どうしてイラクが重要なのかを考えることで「国際社会に通用する人」になるのである。つまり「日本人が国際社会からも尊敬される」ためには、地理的素養＝「地理的なものの見方・考え方」が不可欠なのである。そのためには地理教育がもっと重視されるべきである。

資料1：2005年2月23日の新聞各社記事より
（読売・朝日・毎日・産経・沖縄タイムス・琉球新報など）

* 琉球大学教育学部　社会科教育教室

本稿では、近年わが国で地理教育が軽視されてきた結果として「世界地図認識」が不十分であることを、データ的に裏付けることを目指した。

2．手書き世界地図の分析

私たちの生活舞台はこの地球である。日常生活で地球全体を意識することは少ない。しかし、誕生以来何度もさまざまな世界地図に接している。そして地域イメージを形成しつつ、各自が空間的な「頭の中の世界地図」を認識してきた。それらは無意識のうちに記憶され残る。また日常生活では、テレビをはじめさまざまなメディアに登場する、海外の情報や映像にふれている。さらに自らが現地を訪問する、海外旅行の機会も増えた。

このような各自のイメージにある世界地図を、何も参考にせず「手書き」で描いてもらうことにより、「頭の中の世界地図（メンタルマップの一種）」が集められる。筆者はこれまで表１の方法で、一定の条件を決めて、高校生・大学生・社会人の合計1,878人の「手書き地図」を集めてきた[1]。そしてA～Eの五段階に分類した（資料２－１～資料５－２参照）。これらを分析することで、世界観（世界地図認識）の傾向・特徴が考察できると考えている[2]。

表１：「手書き世界地図」の調査方法と結果

方法：各人の頭の中にある世界地図を自由に描いてもらう
対象：高校生・大学生・社会人、合計1,878人
条件：事前予告なし。何も参考にしないで自分の頭の中にあるイメージで世界地図を自由に描いてもらう。８×12cmの枠内に書くように指示する。（用紙配布）時間10分以内。時間が余れば地名（国・都市）等を記入。
注意：成績や評価に関係しないことを説明し、できるだけリラックスした状態で行う。詳細にこだわらず大まかに全体を描くように指示する。

A段階：日本とその周辺が描けている。	264人	14.1%
B段階：大陸１～２つが描けている。	427人	22.7%
C段階：大陸３～４つが描けている。	847人	45.1%
D段階：およそ正確な世界地図である。	292人	15.5%
E段階：何も描けない（白紙）。	48人	2.6%
合　　計	1,878人	100%

備考：各段階の基準は厳密でなく、筆者の主観で判断した。例にあげた各図は筆者がトレーシングペーパーで写し取ったものである。

Ⅱ．世界地図認識の傾向

1．５段階に分類して考察

第１に「自分の国（日本）」を中央に描く傾向が、ほぼ全員に共通してみられた。A段階「日本とその周辺が描けている」を、判断するのは容易であった。しかし、B段階「大陸が１～２つ描けている」と、C段階「大陸が３～４つ描けている」の区分（境界）には最も苦労した。そこでどんな形であれ、大陸が（一部でなく全体的に）３つ描けていたらC段階とした。したがってC段階が45.1%で最も多くなった。

C段階にはオーストラリア大陸が登場してくるものの、アフリカ大陸がなかったりユーラシア大陸そのものがアフリカと混乱・混同しているものもある。いずれにせよC段階の大部分も「満足のできる」「およそ正確」という世界地図ではなかった。またC段階とD段階の境界もこれに次いであいまいであり、分類には苦心した。

以上をまとめると、残念であるが日本人でほぼ満足に世界地図が描ける、すなわち「D段階」は15.5%であった。仮にこれにC段階の一部（上位）を加えても、20%には満たないだろう。したがって、何も描けなかったE段階の2.6%を含めて、約80%の日本人が満足な世界地図が描けないことになる。私たちはこの事実をもっと謙虚に受け止める必要がある。これは国際化する現代社会に生きていくうえで、深刻な問題であると考えられる。

2．第三世界（地域）認識の欠如

次に詳細にD段階の地図を見てみよう、すると東アジア（日本の近辺）・ヨーロッパ・北アメリカの国名などの認識が比較的正確である。これに対して、アジア（東アジア以外）・アフリカ・ラテンアメリカ・オセアニアの、いわゆる「第三世界（地域）」のイメージが乏しい事例が多く見られた。日本近辺の東アジアが詳しいのは、新聞やテレビの天気予報でたびたび目にするためと考えられる。また、ヨーロッパ・北アメリカが詳しいのは、欧米の情報が日本のマスコミには多いことが要因と考えられる。

C段階に分類した資料６（社会人22歳女性）は、その典型的な例である。「遠くのヨーロッパ」の

方が「近くのアジア」より強く認識されているのである。彼女の認識には東南アジア・南アジアから西アジアのイメージが極端に欠如し、その先のヨーロッパやアフリカにつながらないのである。遠くのイタリア半島（長ぐつ）やイギリスが描けても、近くのフィリピンなどの島々やインドシナ半島がイメージに登場しないのである。

今日の日本社会では、一般にマスコミを含めさまざまな分野で、圧倒的に欧米地域に関わる情報が多く、興味や関心も高い。逆に東南アジアや、その他の第三世界（地域）に関する情報は少なくイメージが乏しい。私たちの「頭の中の世界地図」にもそれが反映され、遠い欧米の方が、近くの東南アジアより詳しく描かれることになる。これは日本人の世界観あるいは世界地図認識の傾向・特徴であるといえる。

3．外国人（留学生）の世界地図

それでは外国人の場合はどうなるのだろうか。海外からの留学生に描いてもらった「頭の中の世界地図」を検討してみた（資料７）。調査事例が少ないため断定できないが、外国人の場合も日本人と同じように自分の国（出身国）を中央に描く傾向が見られた。また自国とその近辺が比較的詳しいのに対して、遠ざかるほど自信のない線になる。

このことからその人が「幼い時からどのような地図にどれだけ接してきたか」という経歴が各人の「頭の中の世界地図」を決定する要因になると考えられる。それぞれの生まれ育った国や地域で「違い」がみられることがわかる。

Ⅲ．地理教育の現状

1．地理（地図）教育の衰退

地理学習は「地図に始まり地図に終わる」といわれて来た。しかし近年学校教育現場では地理教育の低迷・衰退が問題となっている。地理教育の目標は「地理的な見方や考え方」をめざしてきた。すなわち「地図」にふれる機会がなくなったがために「世界地図認識」が形成されずに大人になった人が増えている。いうまでもなくこの原因は、近年わが国で地理教育が軽視されてきた結果である。

高校・大学と約25年にわたる、筆者自身の学校教育現場での体験からもこのことは年度を追うにつれ、深刻化している。小学校低学年における生活科の登場＝社会科（名称）の消滅、小学校高学年・中学校における社会科教科書からの体系だった世界地理記述の消滅は、子供たちの地理を学ぶ機会を減少させた。

小学４～６年生の４割が「天動説」を信じ、地球が丸い（平板でない）ことや自転していることを理解できていない（2004年４月12日付、読売新聞）、という調査もある。

高校では1982年4月、現代社会の誕生にともなって、地理は必修科目から選択科目へ格下げになった。さらに1994年4月の社会科解体＝地理歴史科の新設で、世界史のみが必修になり、地理の学習機会は著しく減少傾向にある。この結果高校三年間で地理を学ばず、地球儀や地図帳に一度もふれることなく卒業するケースが一般的となっている。

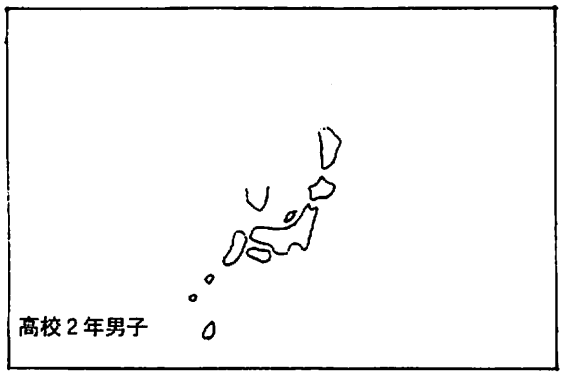
2．教員の地理・地図離れ

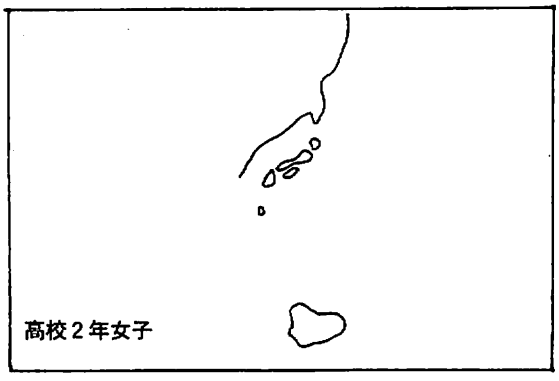
高校での地理の必修科目から選択科目への「格下げ」は、教員採用にも大きく影響してきた。高校教員で、大学時代に地理を第一専攻したものが教員採用試験に合格できる割合は激減している[3)]。つまり「大学で地理を専攻していない社会科教員」が増えた結果、「社会科教師の地理・地図離れ」が多くみられるようになった。地図帳や地球儀を使った授業のできない教員が増えている。

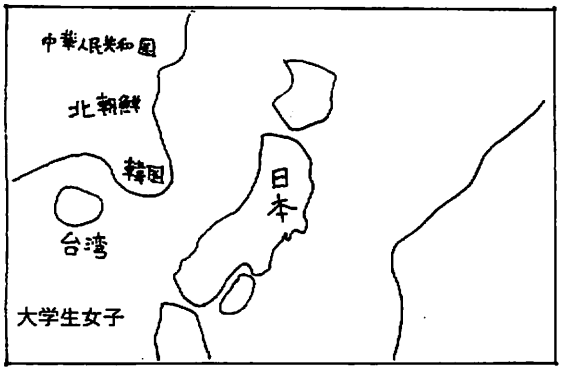
大学教員になってからの筆者の経験でも、教育学部社会科教員養成コースの入学生で、高校時代に「地理」を選択受講した学生の割合は三分の一以下である。彼らは大学卒業後、小・中・高校の社会科教員になるわけであるが、自らは高校時代に地理を学ばなかったケースが増えているのである。また中学校社会科教員で、大学にて地理を第一専攻した割合は10％に満たないと考えられる[4)]。

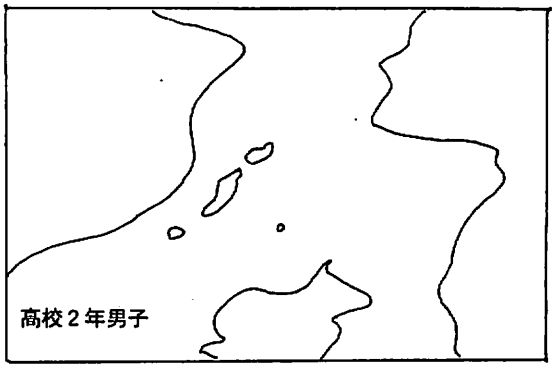
残念であるが「地理をきちんと学んでいない」ために、「地理が苦手な」社会科教員が多いのである。学習者側からみても、小学校・中学校時代「地理に苦手意識を持つ」社会科教員に教えられ、おもしろくなかった地理を、高校や大学で選択・専攻しようとしない。つまり地理教育の「低迷」

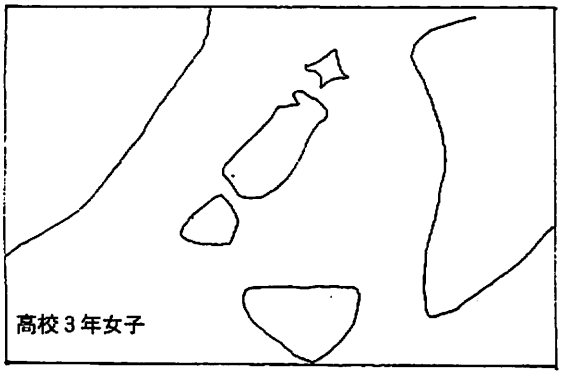
資料２－１：「手書き世界地図」Ａ段階の例（その１）

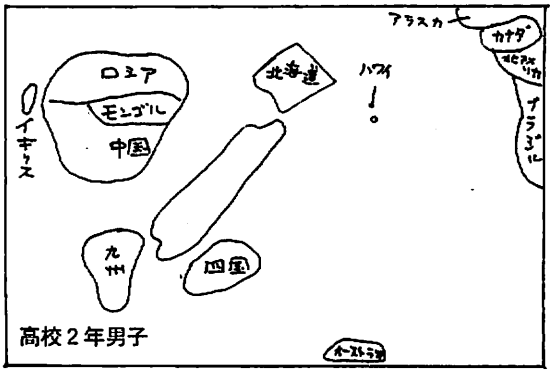


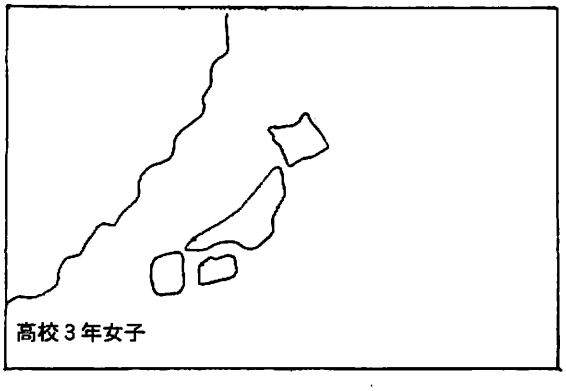


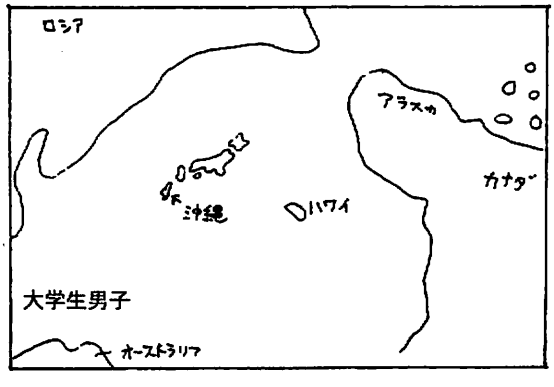




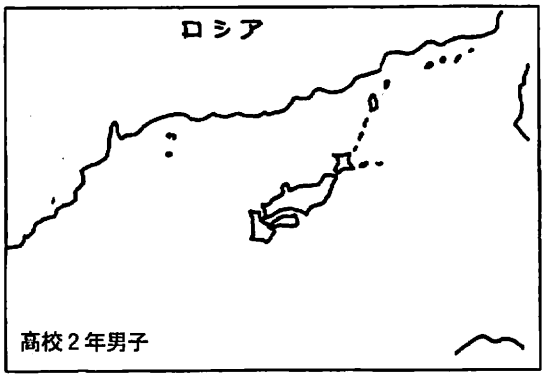




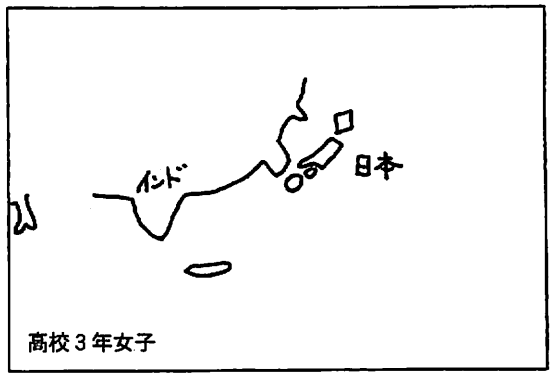




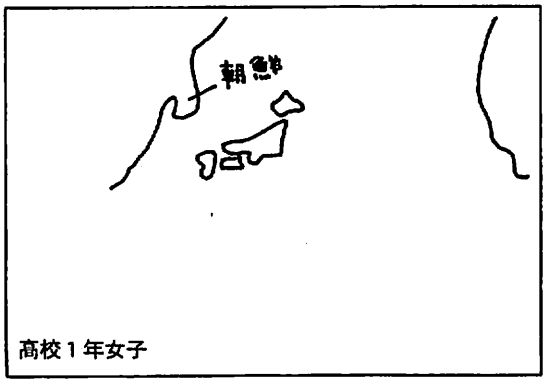
資料２－２：「手書き世界地図」Ａ段階の例（その２）



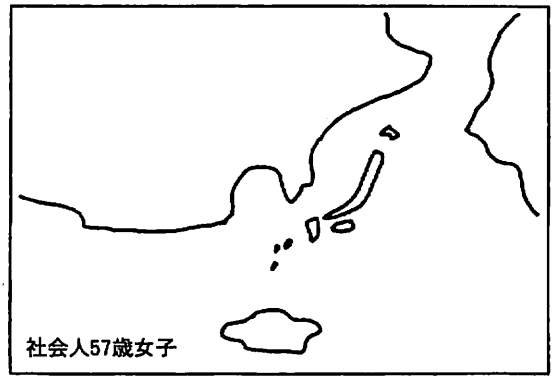
高校２年男子

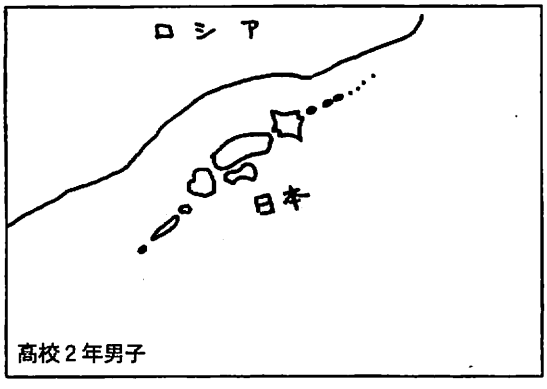


高校３年女子

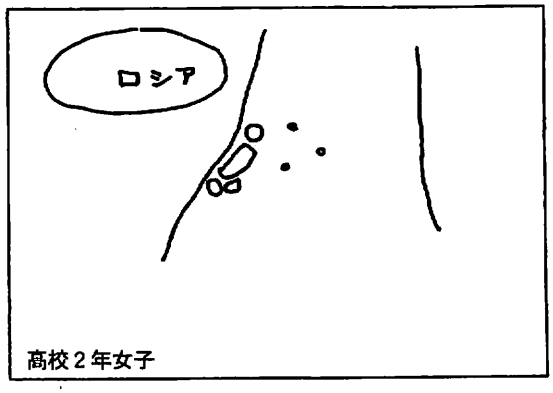


高校１年女子

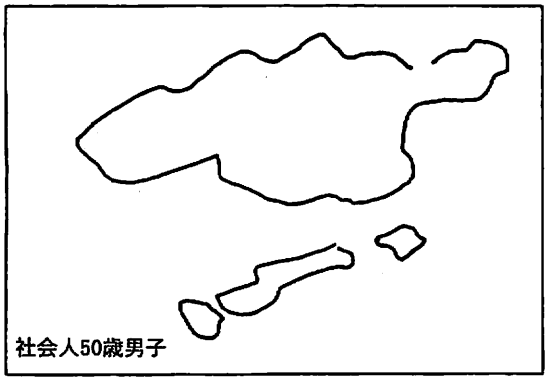

社会人57歳女子

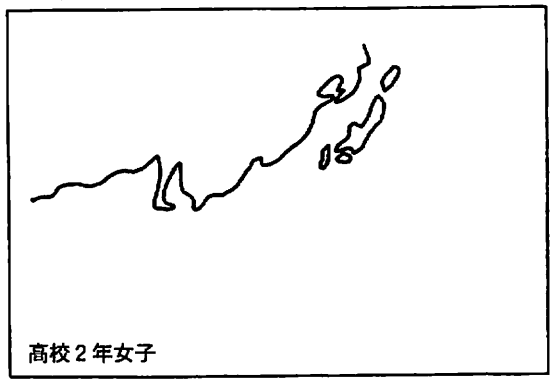


高校２年男子

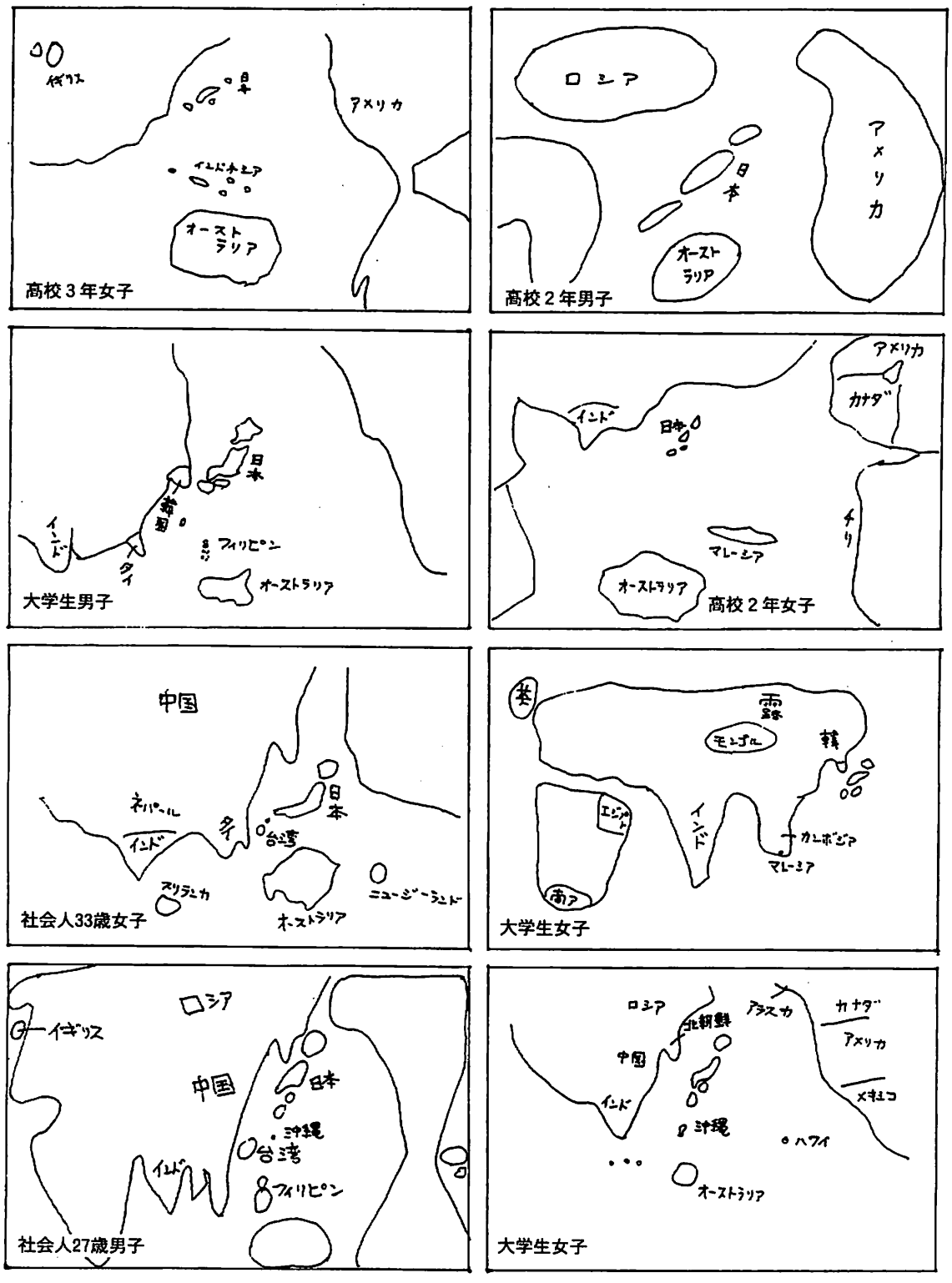


高校２年女子

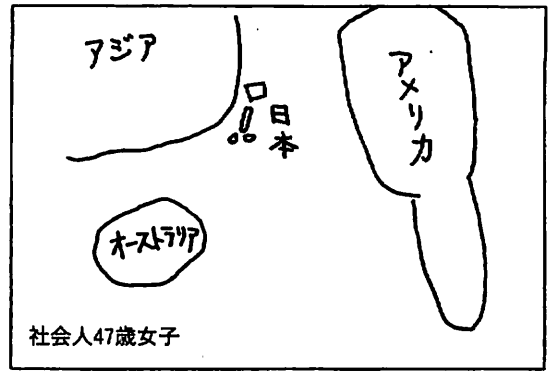

社会人50歳男子

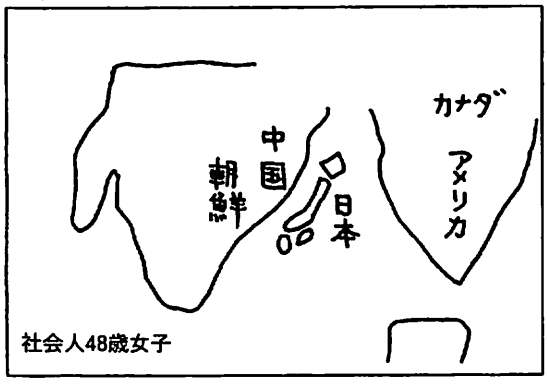

高校２年女子

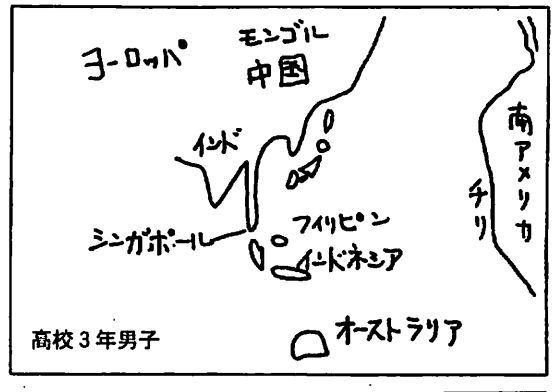
資料３－１：「手書き世界地図」Ｂ段階の例（その１）

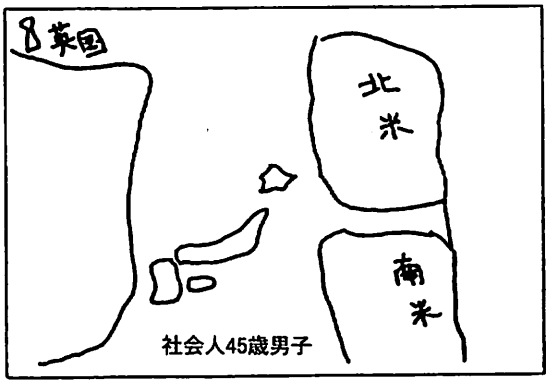


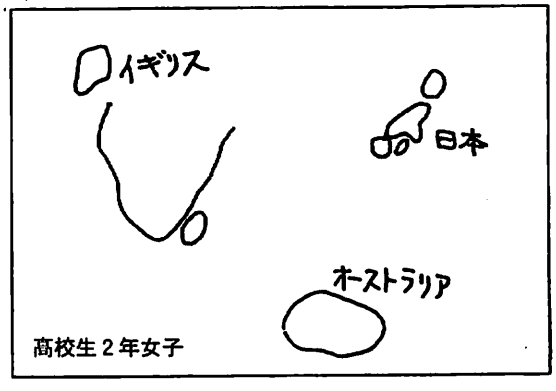
資料３－２：「手書き世界地図」Ｂ段階の例（その２）

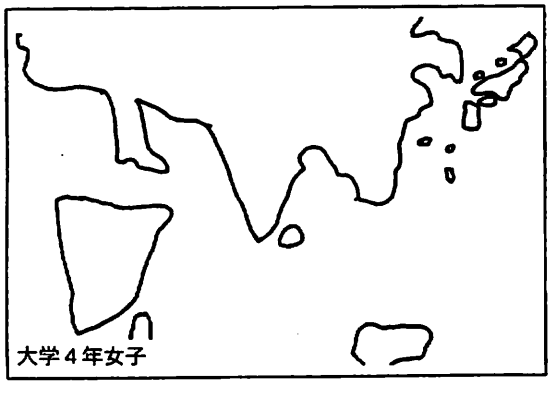


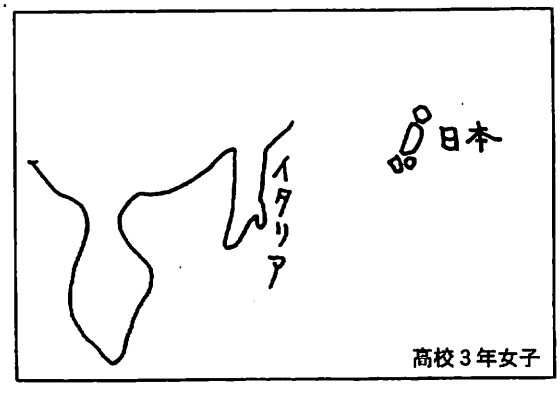




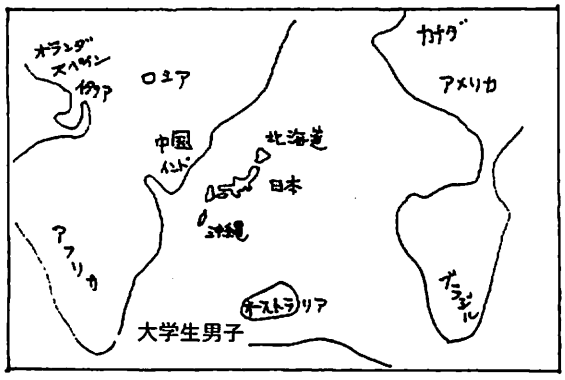




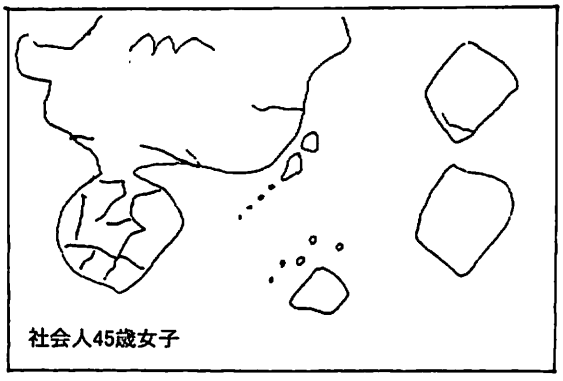


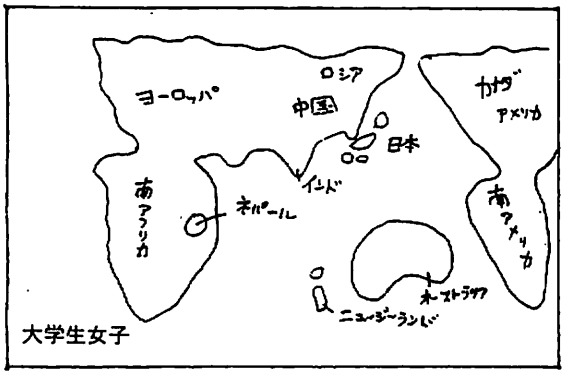


資料４－１：「手書き世界地図」Ｃ段階の例（その１）

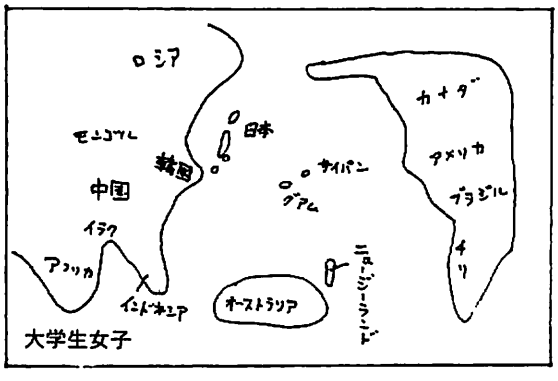


大学生男子

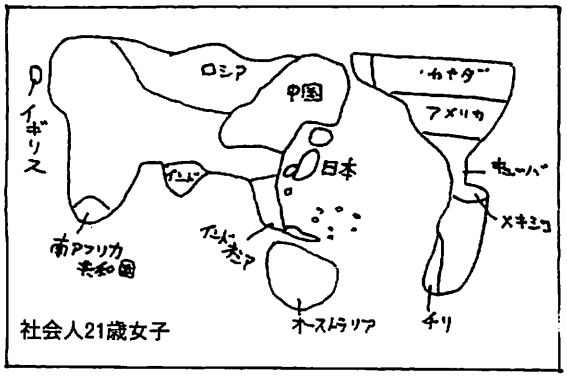

社会人45歳女子



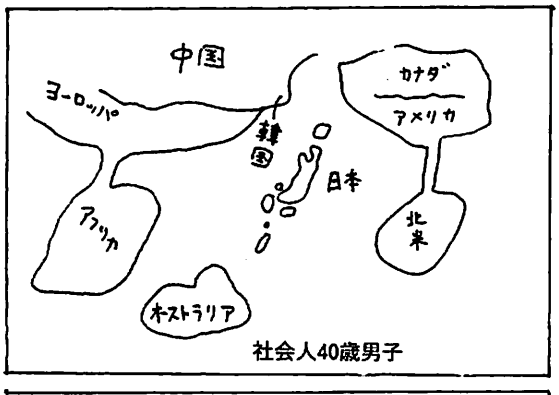
大学生女子



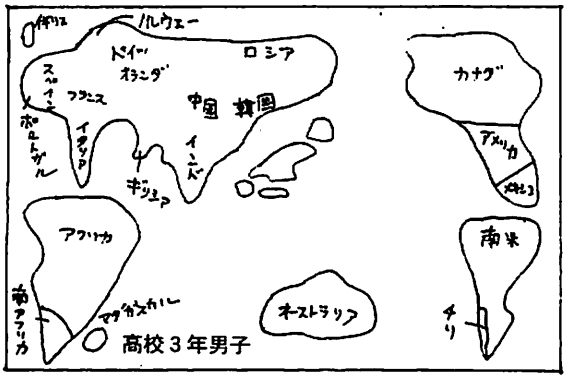
大学生女子



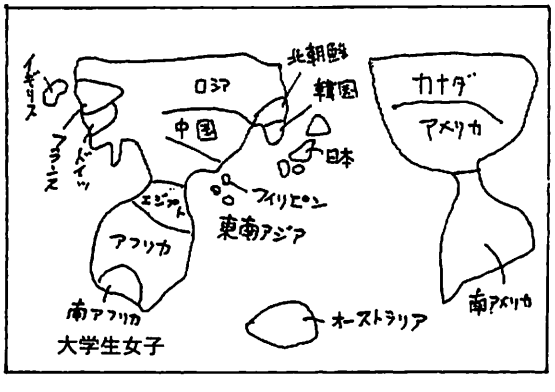
社会人21歳女子



社会人40歳男子

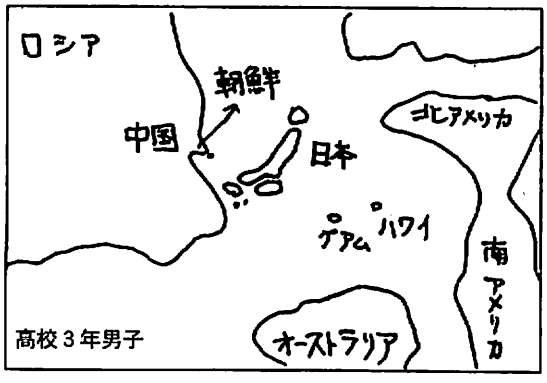


高校３年男子

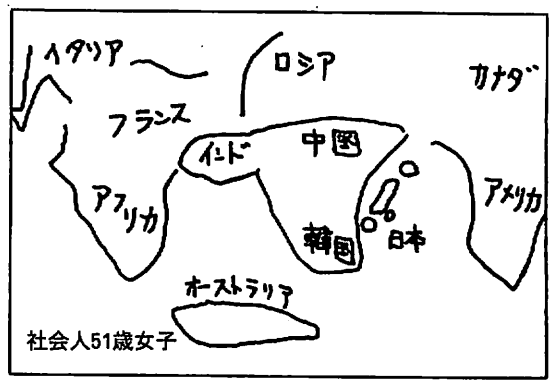


大学生女子

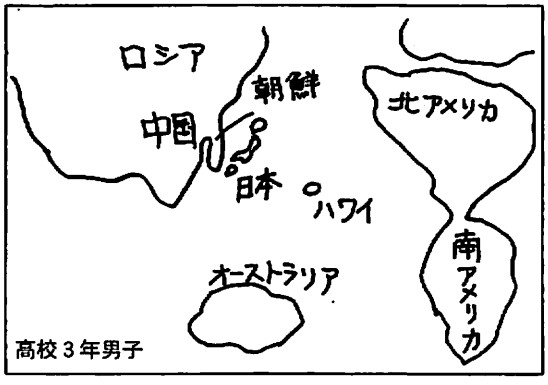
資料４－２：「手書き世界地図」Ｃ段階の例（その２）



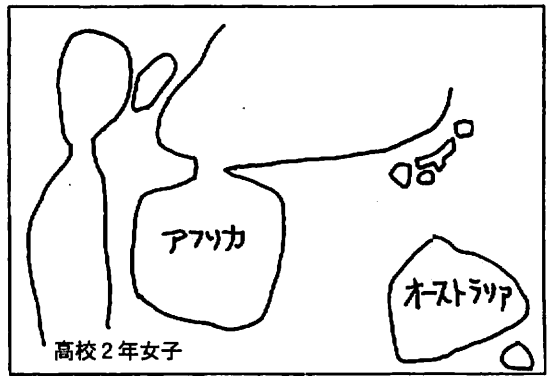
高校３年男子



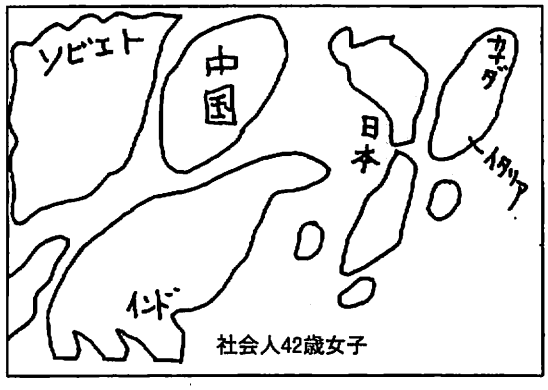
社会人51歳女子



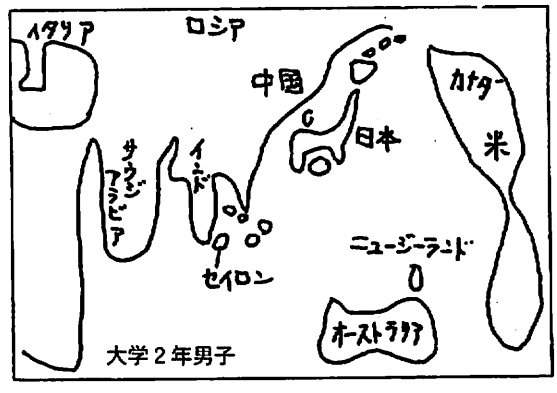
高校３年男子



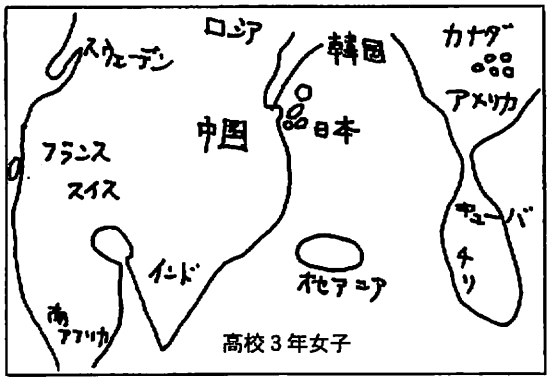
高校２年女子



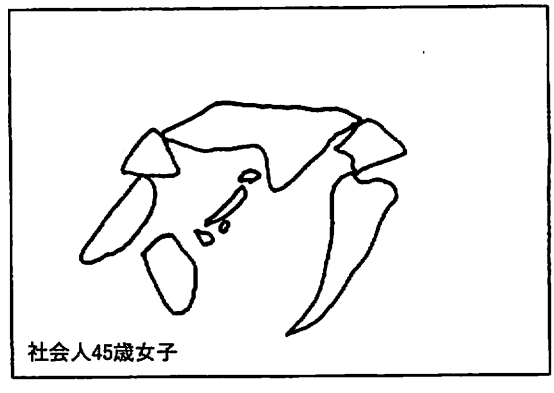
社会人42歳女子



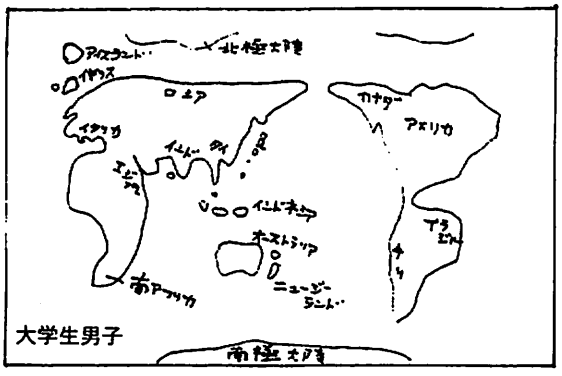
大学２年男子



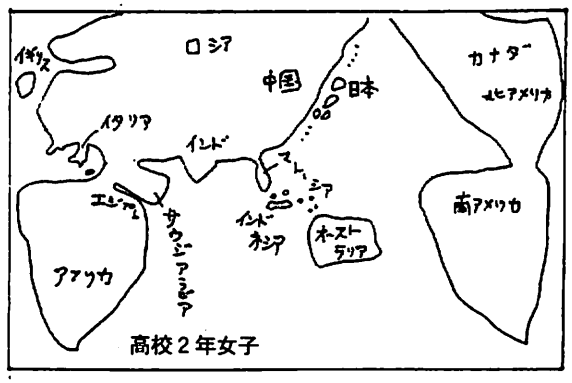
高校３年女子


社会人45歳女子

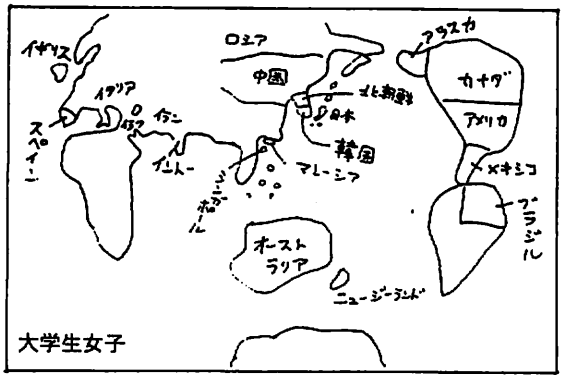
資料５－１：「手書き世界地図」Ｄ段階の例（その１）



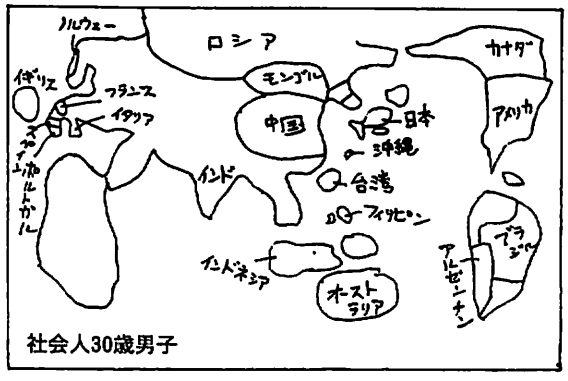
大学生男子



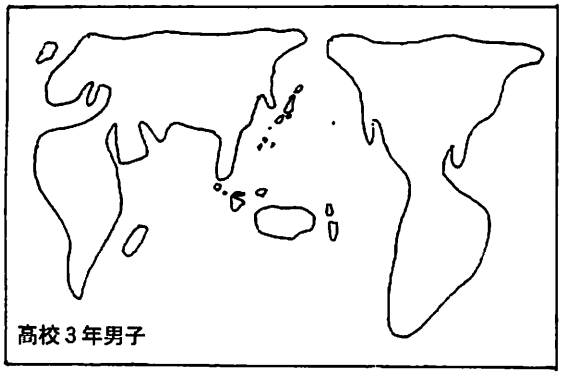
高校２年女子

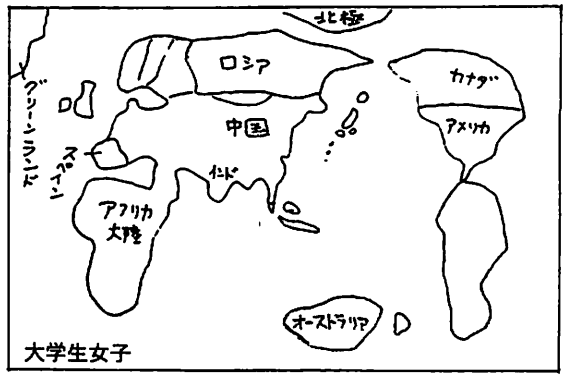


大学生女子

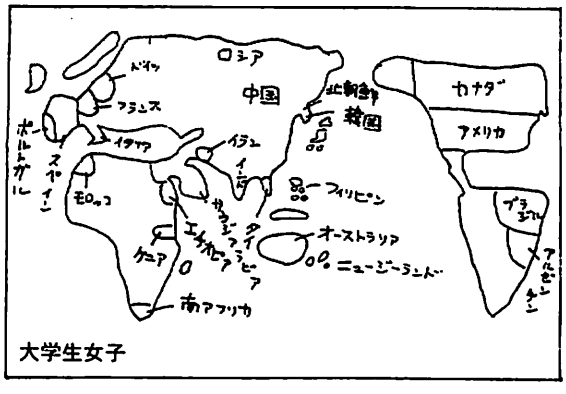


社会人30歳男子

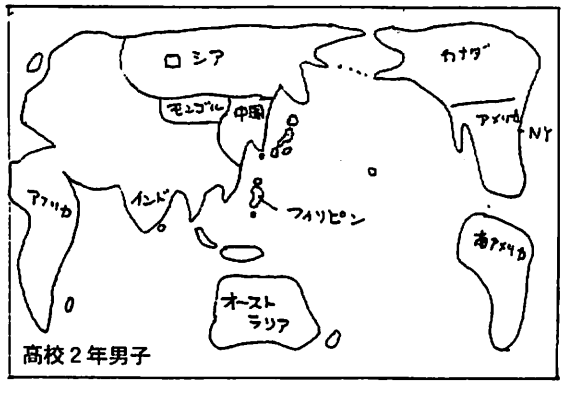

高校３年男子



大学生女子

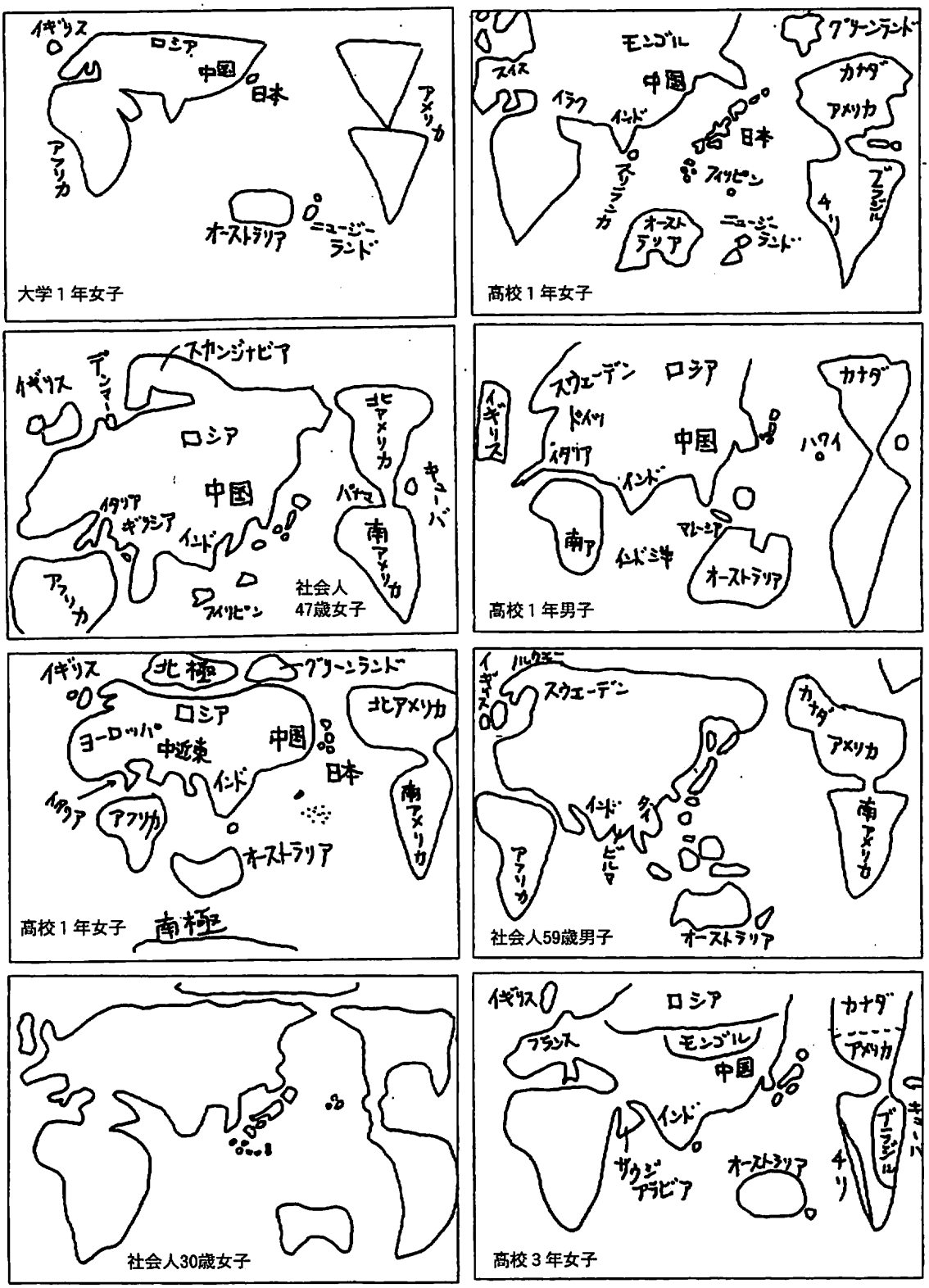


大学生女子

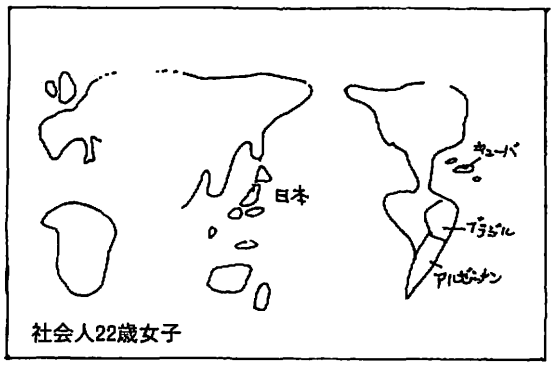


高校２年男子

資料５－２：「手書き世界地図」Ｄ段階の例（その２）



資料６：典型的な日本人の「手書き世界地図」の例



「衰退」の問題は、「地理教育の内容」に問題があるのではなく、「教員側」「教える側」に要因・責任があるのである。

この対策には、社会科教員における「地理専攻教員」の比率を増やさなければならない。そのためには、社会科（地歴科・公民科）で一括した教員採用試験を行うのではなく、小教科（専攻）のバランスを考えた、社会科教員採用試験を実施することが必要である。

Ⅳ．追跡調査にみる「頭の中の世界地図」変化

１．手書き世界地図の変化

ではどうすれば、このような「頭の中の世界地図」は、変化（改善）するのだろうか。答えは簡単である。意識的に世界地図に接する回数を増やせばよいのである。資料８は高校入学時（１年生４月）から２年生終了３学期まで、約２年間にわたり追跡調査したものである。対象は１年で現代社会（必修）、２年で地理Ａ（選択）の受講生である。

筆者の勤務校（当時）では、１年生において現代社会の授業（必修）を受ける。現代社会にも一部に世界地図に接する内容（世界の文化）がある。しかしこれらは限られている。そこで１年生全員に、通常は地理を選択した際に購入する地図帳を、現代社会でも購入してもらい、さまざまな機会をとらえ世界地図に親しませるよう努力をした。具体的には授業の開始時に、発生した海外のニュースを必ずその場所を地図で確認させる作業をした。なぜなら１年生の段階で地図帳に親しむことが２・３年生で習うことになる世界史や日本史、政治経済や地理の理解に大きく影響するからである。

２．世界地図にふれることが大切

資料８をみれば高校１学年４月から２学年４月までの１年間は、現代社会を学んだ結果が影響していると考えられる。またここにあげたのは、次の２学年で地理を選択してさらに地図帳を活用した生徒の事例である。１年目と比較して２年目の１年間の方が大きく変化しているのが読み取れる。この理由は、地理の方が現代社会より世界地図に接する機会が多かったからだといえる。どの生徒も世界地図に描く地名や国名が飛躍的に増えている。

また変化の結果を詳細に見ていくことにより、各個人についての世界認識の地域単位での盲点・弱点が明らかになる。これをもとに各自の課題を指摘し、適切なアドバイスを行えばよりバランスのとれた世界認識を育てていけるのである。

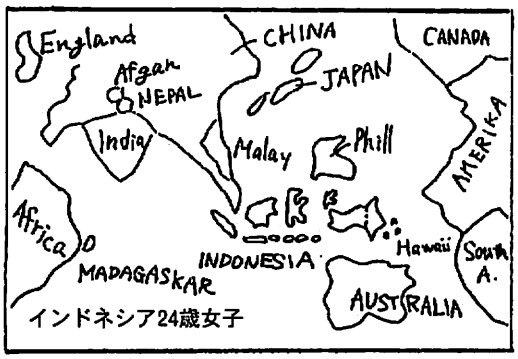
これらの生徒の反応は大変良好で、「ニュースに登場する地名がわかった」「外国の出来事に関心を持つようになった」などがみられた。中には「テレビの横に地図帳を置いて、知らない地名が出てきたら調べるようになった」という、大変うれしい感想を聞かせてくれる者もいる。

この例からも分かるように、頭の中に正しい世界観＝空間認識を描けることは「新しい発見」　　であり「楽しい」ことなのである。地球規模に視野を広げ、空間的に広い視点から社会現象を考察できる力は、将来の「国際人」「教養人」として大切な資質になるのである。そしてこれこそが地理教育の目標である「地理的なものの見方・考え方」なのである。

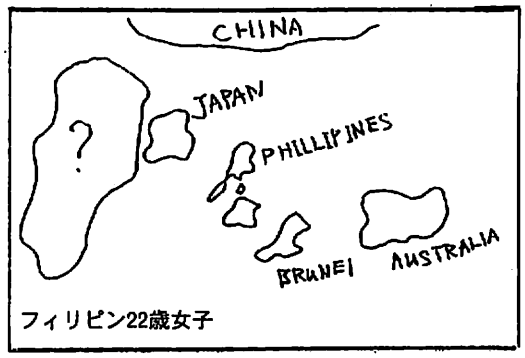
Ⅴ．結語

近年、学校教育では国際理解教育が重要視され

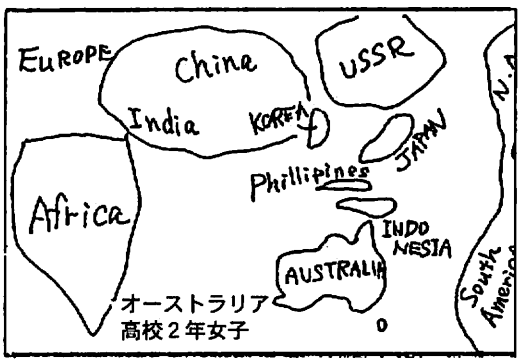
資料７：外国人（留学生）の「手書き世界地図」



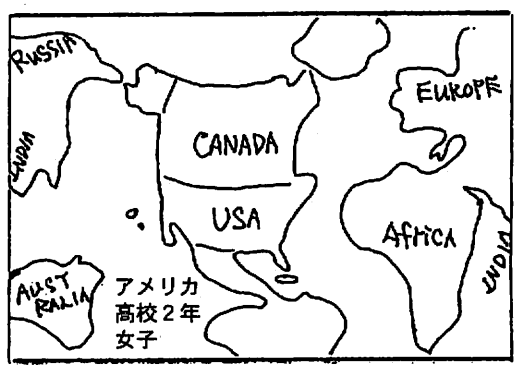
インドネシア24歳女子



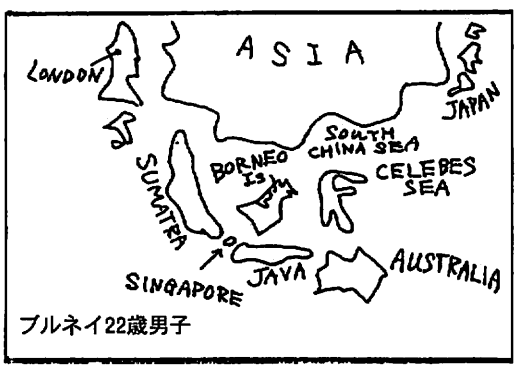
フィリピン22歳女子



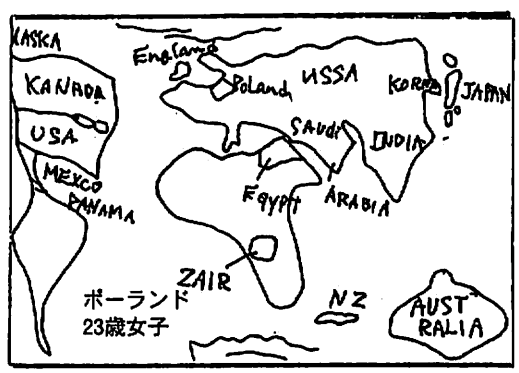
オーストラリア
高校２年女子



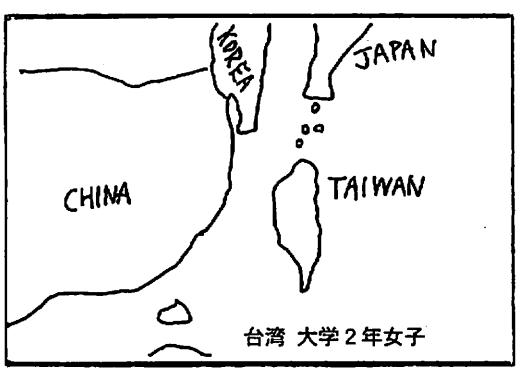
アメリカ
高校２年
女子



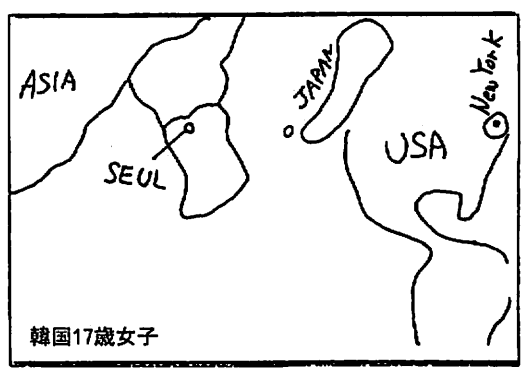
ブルネイ22歳男子



ポーランド
23歳女子



台湾 大学２年女子



韓国17歳女子

資料８：追跡調査にみる「手書き世界地図」の変化

ている。しかし「外国語＝英語」だけでいいのだろうか。筆者は「国際理解はまず世界地図から」を主張したい。英単語を1,000語覚えるのも大切かも知れないが、世界の国名約190か国の名称と位置をマスターする方が、はるかに実用的であり重要だと考えるからである。国際化時代には「読み」「書き」「計算」と並んで「世界地図で考える力」も基礎学力であり、最低限必要な教養＝「生きる力」（国際人としての素養）だと考えている。

社会科の教員は、機会あるごとに世界地図を用いる工夫を、意識的に実行すべきである。そして小・中・高校の各教室に、1枚でよいから世界地図が貼られる予算措置を行政に要求したい。長期的には、小中学校においては「２～３の国」のみを学ぶのではなく、体系だった「世界地理」の復活と、高校での地理を選択科目から必修に戻すことが必要である。

《追記》

本稿は西岡（1996、pp.35～57）の一部に、それ以降に収集したデータを加筆・修正し、新たな考察を加えたものである。「手書き世界地図」の収集に協力していただいた皆様に感謝する。また内容の一部は、沖縄地理学会第24回大会（2005年7月9日、於：沖縄国際大学）、および日本地理教育学会第55回大会（2005年8月6日、於：専修大学神田校舎）にて発表したものである。

《注》

1）「手書き世界地図」のうち、高校生は筆者の過去の勤務校である、京都府立園部高校・京都府立南丹高校（1981年４月～2000年９月）で収集したものである。また大学生は琉球大学教育学部（2000年10月～2005年4月）で収集したものある。

2）本稿の資料２～８で紹介した地図は、表１の手法で描いてもらい、筆者がトレーシングペーパーを用いてできる限り忠実に写し取ったものを、縮小したものである。

3）白石健一郎（1995）地理教員の採用動向、地理40-8、pp.113-114。

4）斎藤毅（1998）地理教育の刷新と活性化に関する方法的一考察、地理学評論71A-2、pp.84-89。および白井哲之（2000）地理教育の展望、地理学評論73A-4、pp.320-326。

《文献》

・猿谷みゆき（1976）メルカトル図法が地理教育に与える影響について、新地理24-1、pp.46-57。
・斉藤毅（1978）児童の心像環境と世界像に関する方法論的一考察、新地理26-3、pp.29-38。
・山口幸男（1979）高校生の地理的世界認識の一端、群馬大学教育学部紀要人文・社会科　学編第29巻、pp.291-310。
・グールド、ホワイト著、山本正三、奥野隆史訳（1981）『頭の中の地図・メンタルマップ』朝倉書店。
・神戸泉（1984）世界の大陸の面積認知について、人文地理36-2、pp.75-83。
・夏目房之介（1987）『夏目房之介の学問』朝日新聞社。
・西岡尚也（1990）自分の空間を広げる楽しさをどう教えるか、地理35-7臨時増刊、pp.40-45。
・西岡尚也（1996）『開発教育のすすめ－南北共生時代の国際理解教育－』かもがわ出版。
・西岡尚也（2002）描いてみよう頭の中の世界地図、地理47-9臨時増刊、pp.120-121。